

戦後抑留者の文集とスケッチを翻刻

—『南方抑留資料が現代に問う「戦争」と「戦後」』を刊行—

南方抑留者は第二次世界大戦後に東南アジアに抑留されて強制労働に従事させられたものの、その実態はほとんど知られてきませんでした。山本博之 東南アジア地域研究研究所准教授らは「忘れられた抑留者」である南方抑留者が、飢餓・酷暑・重労働にさいなまれる抑留生活中に発行した文集、および抑留者が抑留の様子を描いたスケッチに着目し、研究を進めてきました。この研究成果として、南方抑留資料の翻刻版が京都大学東南アジア地域研究研究所から刊行されました。



『南方抑留資料が現代に問う「戦争」と「戦後」——文集『噴焰』および野田明氏スケッチから』（山本博之編著、CIRAS Discussion Paper No. 117、京都大学東南アジア地域研究研究所、2024年）表紙

第二次世界大戦後、樺太、満州、朝鮮半島では日本からの入植者の引揚げが困難を極め、帰国に至らずに死亡する人たちもいました。また、軍人および民間人の一部がシベリアに抑留されて強制労働に従事させられました。これらの引揚げと抑留については多数の本が出版されたり演劇や映画が作られている一方で、南方（現在の東南アジアとほぼ重なる地域）における引揚げと抑留についてはほとんど知られていません。南方の日本人抑留者は軍人・民間人を合わせて 120 万人以上に及び、数字の上ではシベリアの日本人抑留者の約 60 万人の 2 倍に達するにもかかわらず、南方抑留は等閑視されてきました。

戦争についての回顧録は戦時中の体験を書いたものが多く、戦後の抑留体験について書かれたものは多くありません。そのため、抑留の実態を知るためには、私家版の記録や回想録、とりわけ抑留中に書かれた句集や歌集が重要な資料となります。抑留者たちは、終わりが見えない飢餓と重労働に日々苦しみながらも、自分たちが置かれた抑留という境遇および日本と世界の将来について考えを巡らせていました。抑留者が詠んだ俳句や短歌は抑留者たちの思索が凝縮された言葉で表現されたもので、抑留の作業や生活の実態や抑留者の考えを知る貴重な資料です。

今回翻刻したのは、マラヤ（現マレーシア）のエンダウ収容所に収容された作業隊員が抑留中に発行した文集『噴焰』（ふんえん）です。

また、エンダウ収容所に収容されていた野田明氏が抑留中に描いたスケッチをあわせて紹介しています。南方抑留について写真などの視覚資料がほとんどない状況で、野田氏によるスケッチは抑留について知ることができる極めて貴重な資料です。

野田明氏は 1922 年に佐賀県佐賀市で製菓業の長男として生まれ、1939 年から長崎県佐世保市の海軍工廠に工員として勤務しました。1943 年に海軍に召集されて海軍航空隊の整備兵として従軍し、1945 年 2 月に第一南遣艦隊に配属されて南方に到着したところで終戦を迎えました。1946 年 5 月にエンダウ収容所に配属され、1947 年 7 月に帰国するまでエンダウで抑留生活を送りました。

山本博之 東南アジア地域研究研究所准教授が野田氏のご遺族から文集『噴焰』およびスケッチ一式（スケッチ 181 点および短冊 26 点）をお預かりして、研究・教育および一般利用がしやすいように文集とスケッチを整理して本書の刊行となりました。

『噴焰』の記事から浮かび上がるのは、戦争が終わって多くの日本軍人が帰国し、故郷の家族や友人と再会を果たし、祖国再建に取り組んでいる時、なぜ自分は故郷から遠く離れたこの地に留め置かれ、自由を奪われて飢餓と重労働に耐えなければならないのか、そして、もしこの状態に積極的な意味があるとするならば、どのような意味なのか、という抑留者たちの問いです。『噴焰』はこれらの問いを、抑留した英国人ではなく同胞である日本人に時を越えて問いかけています。

本研究は共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点（CIRAS）」（拠点活動期間：2017～2021 年度）の活動から発展した研究として CIRAS Discussion Paper シリーズより 2024 年 10 月に刊行されました。

<タイトルと著者>

タイトル：南方抑留資料が現代に問う「戦争」と「戦後」——文集『噴焰』および野田明氏スケッチから（山本博之編著、CIRAS Discussion Paper No. 117、京都大学東南アジア地域研究研究所、2024 年）

編著者：山本博之 編著

掲載誌：CIRAS Discussion Paper シリーズ (<http://hdl.handle.net/2433/228746>)